

令和元年 7月3日

学校臨床支援センター宗形潤子教授が、 日本生活科・総合的学習教育学会「研究奨励賞」受賞

人間発達文化学類附属学校臨床支援センターの宗形潤子教授が、6月15日、日本生活科・総合的学習教育学会「研究奨励賞」を受賞しました。

【受賞概要】

第17回（令和元年発表）日本生活科・総合的学習教育学会「研究奨励賞」

『小学校生活科の砂遊びが入学間もない子どもの居場所づくりにもたらす影響
～ 関与観察とエピソード記述を手掛かりとして～ 』

小学校入学間もない子どもが生活科の授業において砂遊びを行うことが、小学校での居場所づくりにどのような影響をもたらすかを関与観察とエピソード記述をもとに明らかにしました。東日本大震災による原子力発電所の事故により福島県内では屋外での遊びや活動が制限された時期がありました。私自身の問題の所在は、その制限の後に屋外の砂の入れ替えをし、活動をした際の子どもたちの自己実現や自己解放されていく姿にあります。

研究対象としては、福島市内の小学校1年のあるクラスの子ども（様々な幼児教育施設から入学）26名とその担任教師としました。

研究方法としては、小学校入学間もない子どもが研究対象であるからこそ、客観的な研究方法だけではなく、研究者が代替不可能な自己を意識し、観察者との関わり、価値観、対人関係の取組み方などを意識した上で観察をする関与観察の手法を取り入れました。また、観察したことをエピソード記述として整理し、担任の教諭とのやり取りをするということも行いました。

これらの研究の結果、入学間もない時期、子どもが自分の居場所を獲得していくには、様々な葛藤や気づき、一人ひとりの心の動き、変化や成長があるということが分かりました。そして、砂場という環境と砂遊びという活動は、そのような子どもたちにとって、自他を知り、よさに気付くことを促し支える大切なそして有効な場所の一つであるということが明らかになりました。さらに、砂場、そして砂遊びが教師の子どもへの関わりにも大きな影響を与えることも明らかになりました。入学間もない時期であるからこそ、教師が子どもを自分の意図のままに動かすのではなく、自ら相手に気づき、関わっていくことがで

きる場、そこで子どもが自分の思いを実現して行くことができる機会を設けることが必要であるということが大切だということです。そしてそのような場に身を置くことが教師自身にとっても子どもを信じて待つ、見守るといった変容に結び付いていったことも明らかになりました。

また、本研究で関与観察に基づくエピソード記述によって進めていった結果、行動や事実、子ども自身の記述などに基づく客観的な研究とは、異なるものとなり、そのエピソードを研究者と共有することが教師の授業での具体における子どもの働きかけ等に影響を与えたことも明らかになりました。このことから、今後、小学校をフィールドとしていても、幼児教育同様、主観に基づく研究を進めていくことの可能性や意味も見えてきました。

今後この研究をさらに深めるとともに、研究成果を学校現場で生かしていただくことができるよう先生方と協働で研究を進めていきたいと考えます。現在は生活科の時間に砂遊びを取り入れること、そしてその効果（子どもと教師への影響）や適正な砂の活用等についても研究を進めています。一度失いかけた福島県からの発信であることもこの研究の大きな意味であると考え、さらに研究を進めていく所存です。

【日本生活科・総合的学習教育学会について】

日本生活科・総合的学習教育学会の目的・目標は、生活科と総合的な学習の実践や教育研究を行うと共に会員相互の連絡と協力をうながし、教育研究の成果を広く社会に発信することを通して、生活科と総合的な学習の充実発展と普及に努めることにあります。「生活科」の新設（平成元年）や「総合的な学習の時間」の創設（平成10年）に端を発し、新たな教科構成の原理と教育課程の枠組みによって、これまでにない新しい教育のあり方を追求し、創造することを目指した学会です。今回受賞した「研究奨励賞」は年次大会での発表や学会誌やブックレットに掲載された論文を対象に、優秀な若手の実践者や研究者に贈られるものです。

（お問い合わせ先）

人間発達文化学類附属学校臨床支援センター 教授 宗形 潤子

電話：024-548-8113 メールアドレス：r765@ipc.fukushima-u.ac.jp